樋口真吉と木戸明

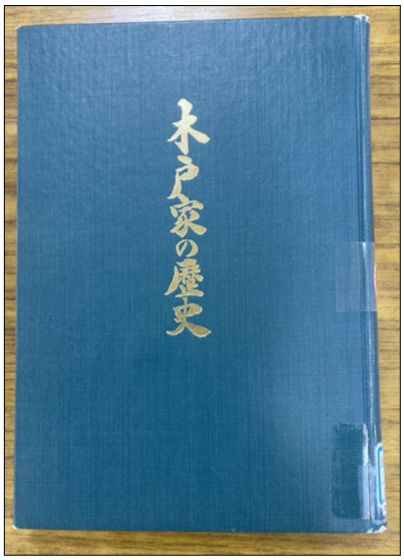
樋口真吉顕彰会・会報誌

発行人
会長
土森正一

文責
寺尾敏夫

樋口真吉(1815～1872)木戸明(1836～1916)

木戸明と真吉の接点を追う



●木戸明について調査した概要をレポートします。資料は「中村市史」、「木戸家の歴史」上岡正五郎著、「幕末足軽物語」南寿吉作、「樋口真吉日記」渋谷雅之著を主に、一部ネットの情報から調査したものです。

●木戸明は樋口真吉とは21歳の年齢差があり、明治期の教育者として高い評価を受けている人物なので、真吉との接点は無いような印象ですが、意外にも幕末の中村と京都で密な接点がありました。

●木戸明は天保５年（１８３４）６月、幡多屈指の資産家吸田家の３代目廣之助の子としてこの地に生まれました。嘉永４年（１８５１）、学問の道を志して京へのぼり、帰京後游焉塾（ゆうえんじゅく）を開いています。その後、中村尋常中学校の開校と共に招かれ、ついで高知中学、第四中学中村分校の教職の間も游焉塾を続け、多くの人材を輩出しました。教育に精進すること５０年、大正５年（１９１６）９月１３日、教育者として多大な功績を残して８３才の生涯を終わりました。

●天保四年（1835）に坂本龍馬が生まれていますから、木戸明は坂本龍馬とほゞ同じ世代で真吉より二十一歳若いことが分かります。

「幕末足軽物語」

●南寿吉の「幕末足軽物語樋口真吉伝完結編」ではＰ１８４に以下の一節があります。

◆文久2年8月4日

（文久二年閏八月）

閏八月一日、曇、当番

松本雄吉　島村恒三郎　弘田章三郎　山本伊之助
永野楠治　入交晋二郎　入交五郎蔵　長尾孫三郎
和田熊太郎　門田為之助
御扈従組則拾人并小八木五兵衛殿江戸へ被差立、此日郷士出足
二日、非番
三日、小八木氏東行、朝訪本山氏
四日、当番、明日駒二郎帰ルト云
五日、雨、上京日光宮東帰
六日、雨、前夜八ツ時五条通出火
大原卿帰京、謁見願、御聞届、本山君東行、小原君本藩行被仰付之
七日、乞謁見、島津三郎君帰於関東
※七日、御目通相願書ヲ上ル、此日島津三郎殿関東ヨリ帰京
八日、上洛

（注112）郷士出足＝前掲の郷士十人が江戸に向けて出発した。引率した小八木五兵衛は幕末に至り土佐藩佐幕派の巨魁となる（第十二章参照）。この日、松平容保が京都守護職に任ぜられた。

（注113）「彬齋養語」および「※壬戌日記」とも、木戸駒次郎の帰国と五条通出火（六日の記述）が四日の項に書かれている。

（注114）大原卿＝大原重徳、京都生れの公家。文久二年六月、勅使として江戸に下り、幕政改革の勅諭を伝達。その後、反幕派として活動。慶応三年王政復古により参与となる。

（注115）謁見願＝大原重徳に謁見を願い出、聞き届けられたようである。大原卿は当時六十歳代の老人で奇矯癖があった。謁見が許されたのは、後述（228頁・注165）の天章との関係や、武市半平太の周旋によるものと思われる。以後、真吉はしばし大原卿に面談する。真吉の高い教養を買われて武市との仲介役を担っていた可能性もあるが、裏付ける資料がない。なお、翌日「乞謁見」とあるのは、京都に滞在している山内豊範に対してである。「樋口真吉傳」（資料24）に「文久二年閏八月一日、当番を勤める。この日、明日から駒二郎が中村に帰ることを聞いた。駒二郎（のち、明と改名1834～1916）は中村の豪商・吸田屋（木戸家）の嫡男であり、真吉の愛弟子であった。木戸家からは種々援助を受けている真吉には駒二郎は気にかかる存在だった。明は明治になって教育者として活躍する。隷書の達人であったという。筆者未見だが、木戸明が「真吉も在京しているからもっと長く京都にいたい」旨、中村の実家に送った手紙の存在は尊敬する先学から聞いた。

（文久二年六月）

六月一日、桑原礼二出府
十日、兼彌太、豪二郎帰府
十一日、以南、奥内、上山ヱ使ヲ遣ス、田邊豪二郎出府
十八日、中村発足
廿日、北奉公人町川久保岩三郎宅へ着
廿一日、御詮議之上達　御聴、御供達御歩行被仰付、役料を以三人扶持、切米八石高被仰付之、又　御詮議振を以当分御歩行小頭場兼帯勤被仰付之
廿二日、御目見
※廿二日、御玄冠前ニテ御目見被仰付之
ここより別冊あり
廿八日、御発駕　布師田御宿
廿九日、本山御宿、此日雨、国見蒟蒻ヲ越
※廿九日、国見峠御歩、御側ニ相従山路泥滑太シ、本山御宿
卅日、立川御宿
※卅日、雨、御路筋ニテ御酒頂戴被仰付、立川御宿

「樋口真吉日記」

もちろんこの文章の前半部分には原典がある。樋口真吉日記である。

●文久二年は真吉にとって激動の年であった。真吉は前年末に吉田東洋に見切りをつけた。人事は勝手に自分で行うことは出来ないので吉田東洋を非難する「存知寄書」を提出し、高知文武館の役からの罷免を図り幡多奉行所に転任となっていた。ところが４月８日吉田東洋が暗殺され、藩政は保守派が担うことになり６月には真吉を藩主豊範のお側役に抜擢、真吉は藩主の参勤交代に随行して京都に向かうことに。途中大坂で坂本龍馬に出会い一円を贈ったのが七月二三日、その後無事京都藩邸に着任した後に木戸駒太郎が京都から中村

に帰るという記事が日記に記録されたのが閏八月（九月）四日である。この時木戸駒二郎は二十七歳、中村では真吉は学問と剣の師範でもあるから真吉が京都に赴任したことは先行して京都で漢学を学んでいた駒二郎は土佐藩京都藩邸に寄って真吉の上京を知ったに違いない。足軽物語で紹介があるように駒二郎が手紙で「真吉も在京しているからもっと長く京都にいたい」と実家に書き送ったらしい。そこで「木戸家の歴史」からこの部分の情報を追ってみる。

●この本は上岡正五郎先生の著で、近年の個人情報にうるさい時代ならとても出版は出来ないであろうほどに木戸家の歴代の系図はもちろん多くの人物について記載されている。その中で木戸明に絞って情報を追うてみる。

●木戸駒二郎勉学歴

七歳にして弓術、剣術は無外流を学ぶ。九歳で常照寺の知恩師から学問を学ぶ。十三歳にして樋口真吉について文武を習う。文とは四書の講義、武は大石神影流剣の修行。十五歳で安岡良亮について佐伝、詩経、書経の講義を受け漢学の学問は大いに進んだ。十七歳で田所左右次について砲術を学ぶ。この年木戸家が大砲製造料として二百両献納している。

●京都遊学歴

「学問は良い師を得て次第にその度を進めたが、それでも飽き足らず安政四年（1857）五月ついに京都遊学となる。」と記載されているが、これが第一回目の遊学で、「二回目は文久二年六月から九月まで滞在し、孫子、八大家読本を研究の中心とした」とあるも「この行はただ学問のためのみでなく、天下の大勢視察のためでもあったらしい」とあるので上京してきた真吉との交流も当然あったと想定できる。木戸家所蔵文書に「秘録」があり、大判和紙四つ折り百五十頁には「身辺のことは一句もなく、すべて国家の動きや京都の情勢にうずめられており・・」という。また「幕末時代の彼は、ただに漢学のみに没頭した学問一辺倒ではなく、郷土の周囲から受ける勤皇、国事への息吹きと、京都での勤皇思想の裏付けを得ての勤皇活動である。但し彼の真骨頂はあくまでも学問を通しての報国であった。」と記載されている。

●記述に誤りを発見。

左記に示した通り文武館が完成すると木戸明は文館御用教授取調に任命され・・とあるが、文武館の完成を文久二年六月とあるのは間違いで、文武館の完成は安政二年六月であることは「樋口真吉日記」でも明らかである。上岡正五郎先生の勘違い

第三回上京は明治六年（一八七三）二月、彼四十才で四月迄三ケ月滞在して学問を深めている。

幕末時代の彼は、たゞに漢学のみに没頭した学問一辺倒ではなく、郷土の周囲から受ける勤王、国事への息吹きと、京都での勤王思想の裏付けを得ての勤王活動である。然し彼の真骨頂はあく迄も学問を通しての報国であった。

樋口真吉の提唱した文武館（文久二年六月木戸家の北隣（奉行所の南）へようやく設立せられると、彼は文館御用教授取調を命ぜられ、愈々郡の後進約百名を指導することとなる。しかも彼はこの前年の文久元年家塾遊焉堂を開いており、文館にあきたらぬ者は多くこの塾に入って さらに彼の講釈をうけている。

文館は一般に文武館といい郡府附属の官立校で、中ごろ敬止館、のち行余館といい、明治五年学制頒布で廃校となる。（高知藩教育沿革取調参照）

彼の勤王或は義捐篤行の行為は、父広之助と表裏一体の関係にあり、広之助の項にあげた各項目はそのまま明の行為と云えようし、また他の親籍の同輩等と同じく民兵を志願したことも、百姓駒次郎の時局即応の態度と言えよう。

彼は、慶応元年（一八六五）三月四日父広之助の死亡に伴って、身分上に大きな変化をきたした。父広之助は文久三年（一八六三）独礼御目見、浪人を許されていたが、その死亡によって、父の浪人勤務年数（規定四十年）不足のために独礼御目見と浪人はのぞかれ、御郡方直支配と苗字・帯

木戸明書

安政２年６月文武館完成

	和暦	西暦	記事	年齢	樋口真吉	西暦	年齢	木戸明
■	天保8年	1837	大塩平八郎の変	23歳	★第一回回国の旅：長崎訪問：柳川藩大石新陰流に入門し29日で免許皆伝授与さる。	1836	1歳	木戸明誕生
■	天保11年	1840		26歳	★第二回回国の旅：九州へ剣術修行			
	天保14年	1843	アヘン戦争	29歳	・清国が英国に負ける！	1843	7歳	弓術、剣術は無外流を学ぶ
■	弘化元年	1844	オランダ国王開国を勧告	30歳	○文武館建設の建白書提出（第一回）	1845	9歳	常照寺の知恩師から学問を学ぶ。
■	弘化2年	1845		31歳	★第三回回国の旅：大坂京都の旅	1846		
■	弘化4年	1847		33歳	★第四回回国の旅：鎮西三遊の旅九州へ			
■	嘉永2年	1849		35歳	○文武館建設の建白書提出（第二回）	1849	13歳	樋口真吉について文武を習う。文とは四書の講義を受け、武は大石神影流
					★第五回回国の旅：剣術・砲術修行に九州へ　長崎・柳川			
■	嘉永3年	1850		36歳	●坂本龍馬（渡川の河川改修工事）と幡多奉行所で逢う	1851	１５歳	安岡良亮について佐伝、詩経、書経の講義を受け漢学の学問は大いに進んだ。
■	嘉永5年	1852	佐賀藩反射炉築造	38歳	★第六回回国の旅：中村⇒長崎⇒博多⇒江戸⇒帰郷の諸師養成の長期旅行			
					長崎でジョン万次郎に面会/大坂から佐々木高行が合流/江戸で佐久間象山に学ぶ			
■	嘉永6年	1853	ペリー浦賀来航	39歳	4月福岡宮内が中村に来航、面談を受ける。１１月歩行格に昇進	1853	１７歳	田所左右次について砲術を学ぶ。この年木戸家が大砲製造料として二百両献納してい
■	安政元年	1854	日米和親条約	40歳	下田など幡多郡１７か所に砲台設置・民兵募集/入田で銃砲操練始まる。			
■	安政2年	1855		41歳	○6月８日文武館完成　　⇒藩政記録に記載がない。	1855		
		1857	韮山反射炉完成	43歳	文武館の教壇に立ち後進の指導に従事	1857		
■	安政5年	1858	海防令書	44歳	文武館の教壇に立ち後進の指導に従事・後藤象二郎が幡多奉行に着任	1858	２２歳	文武館御用教授取調を受諾し指導開始
■	万延元年	1860	桜田門外の変	46歳	香美郡奉行所に奉職後、高知文武館の立上げの役に就く	1860	２４歳	第１回京都遊学/文館御用教授取調
■	文久元年	1861		47歳	９月帰国した武市半平太と会う。土佐勤皇党結党	1861	25歳	文館御用教授取調・游焉塾創業
■	文久２年	1862	生麦事件	48歳	３月２４日龍馬脱藩　　４月５日高知の文武館開校・中村の文武館は敬止館と名称変更。	1862	２７歳	第２回京都遊学（６月~９月）真吉と交流
■	文久２年	1862	生麦事件	48歳	４月８日執政吉田東洋暗殺、			敬止館御用教授取調・游焉塾
				48歳	６月２１日お目見格に昇進、藩主に拝顔、藩主とともに上京			
				48歳	●７月２３日大坂で龍馬に逢う、「逢竜馬贈１円」と日記に記す			
■	文久３年	1863	薩英戦争・下関事件	49歳	１月容堂公と共に蒸気船で大坂へ、途中伊豆下田港にて容堂－海舟会談で龍馬赦免	1863	28歳	敬止館御用教授取調・游焉塾
			8月18日の政変	49歳	４月帰高（勤皇党弾圧始まる）文書による献策を連発			
■	元治元年	1864	第一回長州征伐	50歳	雌伏続く	1864		敬止館御用教授取調・游焉塾
■	慶応元年	1865	第二回長州征伐	51歳	御勘定人加役拝命・武市半平太切腹			敬止館御用教授取調・游焉塾

での七年間、駒二郎は文武館で真吉と共に講師として青年たちを教える立場であった。彼の２回目の文久二年六月の京都遊学は、真吉は事前に相談も受けたはずである。駒二郎は真吉の六月の出世を知る前に上京したかもしれないが、少なくとも真吉は駒二郎の京都遊学を事前に知る立場にいたはずで、京都に着いた時点で駒二郎との連絡を試みたのではないか。真吉の日記に「明日駒二郎帰ルト云」の九文字の背後には真吉の駒二郎に対する万感の想いが込められていると感じてしまう。

駒二郎と砲術

●木戸家は代々商家として商いをしていた家系ゆえに大坂や長崎の情報には敏感であった。その表れが海防意識である。木戸家が大砲の鋳造費用として莫大な献金を行っていたことが「中村市史」にもある。木戸駒二郎においても十七歳で田所左右次について砲術を学んでおり、この年木戸家が大砲製造料として二百両献納していることはよく知られている。

●それればかりか青銅製の大砲を３８門も鋳造して藩に献納したと書かれている。そして渡川（四万十川）の河原から香山寺の山複にムシロの的を置いて試射をしたとある。この３８門の大砲が真吉が命じられて幡多沿岸十七カ所に砲台を構築した時の大砲として利用されたと考えられる。

●木戸明は真吉から受け継いで地元教育に邁進した生涯を送った。

遊焉（ゆうえん）堂

木戸明は学問の人であり、その最大の功績は教育者として地元教育に専念したことである。明は京へ３度遊学しているが、維新後は、地元に残り、中村大神宮横の自宅に「遊焉（ゆうえん）堂」を開いて子供の教育に従事した。左上図は明治十六年の調査であるが、この塾の概要が描かれていて文久元年創立とある。明治五年廃すとあるのはこの年文武館の建物に中村小学校が開校された故であろう。生徒数二百人とある。塾生には、安岡雄吉・秀夫兄弟（良亮息子）、吉松茂太郎（海軍大将）、仁尾惟茂（初代専売局長官、貴族院議員）、幸徳秋水らがいる。

●木戸明は、中村中学、高知中学（ともに旧制）でも教壇に立ち、高知時代の教え子に、後の首相の濱口雄幸のほか、野村茂久馬（土佐の交通王）、由比質（旧制松山高校初代校長）ら三千人の教え子がいる。木戸明没後３年（大正８年）、中村小学校校門前に木戸明銅像が建てられた際、濱口雄幸が資金提供を申し出た手紙（写し）も展示されていた。銅像は太平洋戦時下、銅材提供の犠牲になり今は無い。

高知県下土佐国幡多郡旧高知藩領地内寺子屋取調表

一	名称	遊焉堂	
二	所在地	中村字土居式	
三	塾主氏名	木戸明	
四	兼テ教ヘシ学科	皇漢学 詩文	
五	教師ノ数	男 一人	女
六	生徒ノ概数	男 二百人	女
七	授業ノ順序	読書ハ孝経ヨリ四書五経左伝ノ素読ヲ一日一回授ケ四書ヲ卒フル比ニ其講義ヲ授ク明治紀元以来五経左伝ニ代フルニ国史略十八史略外史ノ類ヲ以テス習字ハ伊呂波ヲ了リ要文章ノ類ヲ草ニ唐詩選ヲ楷ニ国尽ノ類ヲ行ニ一日三回一枚二字ヨリ二行四字乃至八字ヲ授ク五日毎ニ浄書十二ケ月ニ惣浄書作文ハ記事論説詩作ハ五七言絶句古詩律共ニ授ク	
八	習字本及読書用書	習字本ハ要文章唐詩選国尽三体詩ノ類読書ハ経書及和漢歴史詩文集西洋飜訳書等ナリ生徒ノ好ミニ応シ一定ナラス	
九	学習年限	年限ヲ定メス凡ソ無点物ヲ読ミ粗其義ヲ会得スルヲ以テ度トス尤生徒ノ賢愚ニヨルト雖モ三年ニシテ退学スルモノ多ク其業ヲ終フルモノ少シ	
十	束脩謝儀	定リ無シ各自ノ意向ニ任ス大抵束脩ハ酒一樽肴二三種謝儀ハ一ケ年金一円又ハ米四斗以内トス	
十一	塾主ノ行事		
十二	塾主ノ身分	士族勤務ノ余暇ヲ以テ授業ス	
十三	沿革及雑事略	文久元年一月家塾ヲ創立シ明年二年前後極メテ隆盛明治五年十二月ニ廃ス授業時間ハ六時間休業ハ毎月一日十五日五節句氏神祭日一月一日ヨリ十五日十二月廿五日ヨリ末日迄別ニ規則ヲ設ケス五倫五常ノ道ヲ守ラシムルニ止ル	
十四	調査セシ事実計数ニ関スル年代	明治五年	

明治十六年七月十五日調　調査者氏名　谷川　璘

●樋口真吉の墓碑名は木戸明だという文に出会った。「現存の真吉墓碑の揮毫者はこの木戸明でないかと思っている。ただし根拠はない。真吉の墓に字を書く人、自他ともに適任と見られる人、木戸明しかいない。」とある。

真吉の墓碑の揮毫木戸明説に賛成したい。木戸明の真吉への敬慕の気持ちがどこかに表現されているはずと考えたいからである。

●右の写真は木戸明ご本人の墓碑、四万十市内の正福寺にある。幸徳秋水の墓も近い。

槍ヶ岳に着信

●気楽に顕彰会の仲間にメールを送ったら返信が来て驚いた。友人が長野県の大学出身であることは知ってはいたが、いきなり今槍ヶ岳山頂からメールしていると返信が来たのである。私は富士山しか登山の経験が無いので分からないが、少なくも槍ヶ岳山頂の写真は何度も見たことがある。その山頂からのメールが着信したのでびっくりである。慌てて下山の無事を祈っていると返信したことであった。この記事はしばらくして地元紙に友人が投稿したものである。この記事にはメールの事には触れていないので敢えて下記にメールの内容も披瀝します。山麓では電波が繋がらないのでこのようなスマホでの交信は出来ないのだが山頂では電波が繋がるらしい。野村昌男氏は樋口真吉顕彰会を支えている幹部の一人で彼の祖父の姉さんが樋口家に嫁いで居て樋口家の縁者でもある。お陰で樋口真吉顕彰会のメールが槍ヶ岳山頂に足跡を残したことになった。愉快である。

2024年6月13日
高知新聞

82歳の槍ケ岳登山

野村 昌男 82 自営業(四万十市板ノ川)

5月23日、槍ケ岳に登った。母校の山岳部OB会が明神池畔の嘉門次小屋であり、ついでに槍ケ岳まで足を延ばした。ほかの皆さんは涸沢までの往復とのことで、槍ケ岳登山は自分一人になった。22日は槍沢ロッジに宿泊し翌日、槍沢の雪渓を8時間かけて登った。

標準は6時間だが、82歳の僕の足では8時間、ひたすら下を向いて登る。一歩一歩数えて登る。12本爪のアイゼンが重い。もうこんな山登りはしたくない、と思いながら登った。

槍ケ岳の穂先は雪もなく鎖と鉄のはしごで、少しも怖くない。30分の岩登りで、頂上に飛び出した。人は誰もいなくて、自分だけの頂上だ。学生のころ何度も登った山だからあまり感激はなく、写真を撮って15分で引き揚げた。

槍ケ岳山荘の宿泊客は僕を含めて3人だけ。1人1部屋のぜいたくな宿泊になった。最盛期には700～800人が泊まるそう。この時期は極端にお客がいないことが分かった。小屋泊まりはこの時期に限る。

24日は早朝、固く締まった雪渓のうえを下山。アイゼンのキュキュという快い音を聞きながら、いい気になって下りていたら、つまずいて万歳状態で滑落した。幸い5㍍くらいの滑落で、ペットボトルを飛ばしただけで済んだ。

2度転んだ。年には勝てない。足が思うように上がっていない。体力の衰えを思い知った。その夜は嘉門次小屋のいろりを囲み、7人の仲間と大いに飲んで歌った。来年は、西穂高岳に登る計画を幹事から出された。登れるかな。

野村　くん

しばらくです。

御提案のあったＦＭはたらんど　について、一歩進めるとすればどうすればいい

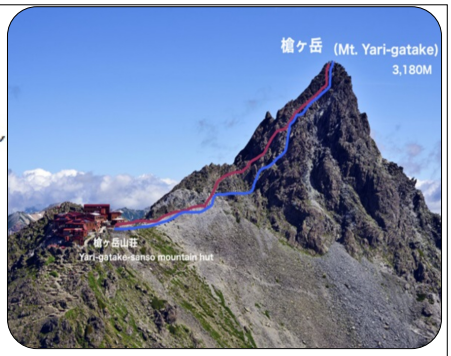
5/31に定例会があるので、その前にこの件を進めておきたいのですが・・。

まだ私にはイメージが出来かねています。

沢田さん共々一度伺ってどうすれば良いのか詰めておきたいのですが・・・。

ご意見をお願いします。

寺尾　拝



寺尾くん、FMはたらんとの件は、延期してください。今槍ヶ岳の頂上からメールしています。会議には出席します。

編集後記

●六月十四日樋口真吉の命日に例年通り顕彰会で樋口家の墓の清掃を行い参拝しました。僅かな山道ではあるが次第に上りがしんどい年齢になりました。

●樋口家の墓地は市内の羽生山にあるのだが、登り口に樋口家の墓地の所在を示す案内板を建てることを計画しています。しかしいざこれをやろうとすると管理人が誰なのか分からない、何とか目星が付いたという段階です。

●龍馬ワールド四万十が成功裡に終わって未だ9カ月ですが、次回の和歌山大会が7月12～14日で開催されるので、四万十龍馬会のメンバーと我が樋口真吉顕彰会も前回大会のお礼を兼ねて土森会長、植田顧問と寺尾が参加してきます。

●酷暑の中皆様方にはくれぐれも著中お見舞いを申し上げます。